

地味でカントボーイな国語教師の僕、気がついたら体育教師のち○ぽをずっぽりハメてた……！？

「んんっ、あっ……っふ、ンンッ！」

「あはは、本当にマンコみたいですわね。えっらいなあ……」

体育教師の明智先生は、僕の下着に手を突っ込みながら、男にはないはずのクリトリスをくにくにと擦っている。

その度に全身がビリビリと痺れるように気持ちよくって、僕は声を我慢することができなかった。

「ちょっ、だ、ダメですって！そ、そんな触り方っ！んあっ……んん、っ」

「何言ってるんですか、ちゃんと触って見ないと原因がわからないでしょ？」

「そ、そうですけどおっ……っ、ん、ふっ……！んんっ」

明智先生の手はどんどん激しくなっていき、僕の下半身からはぐちゅ、ぐちっ、といやらしい音が聞こえ始めた。

こんなハズじゃなかったのに。

僕は恥ずかしさでどうにかなってしまいそうな気持ちを抑えながら、ただただ快感を感じ続けるしかなかった。

◆◆◆◆◆

全ての始まりは、この日の朝に始まった。

「……はっ！？」

寝ぼけながらトイレに向かった僕は、目の前の光景が信じられなかった。

ちんぽがない。

そしてその代わりにあるのは、いわゆるマンコの部分。

なんで？？？僕は男だよな？

まだ夢を見てるのかも、なんて思ったけど、目の前の光景はどう考えても現実で。

混乱する自分をなんとか落ち着かせて、職場に向かうことにした。

僕の職場は高校。

国語教師として働いている。

朝はどうしてもバタバタしてしまうので、いつも気がつくとき昼休みになっている。

「はあ……なんでこんなことになったんだ……」

どうしても嘘だと思いたくて、こそこそ隠れながらトイレに来たけど、やっぱり状況は変わっていないらしい。

「あれ、天野先生。どうしたんですか？なんか元気ないですね」

「あ、明智先生っ！」

トイレで僕に声をかけて来たのは、体育教師の明智先生。

体育教師というだけあって、筋肉質で日焼けしていて、すごくワイルドな感じの先生だ。

女子生徒から人気があるのもわかる。

「いや、別に……その……」

「なんか顔色悪いですよ？体調悪いとか？」

「い、いえ……そうではなく……」

明智先生は兄貴分で面倒見のいい人なのだ。

だから僕が浮かない顔をしているのを、見過ごせなかったんだろう。

「何か悩みがあったら相談に乗りますからね！」

いま考えたら、僕は自分のちんぽがなくなったことで混乱していたんだと思う。

そんな風に言われて、正直に話してしまったんだ。

「実は……その……男性器がなくなってしまって……」